連載第十二回
モックン・カズローの

「京」潮の香り

縁日からフリマ、そして手作り市、人の温もりが恋しくなった町の趨向。

「京都CF！5月号」の綴じ込み別冊をご一読頂いている読者ならご存知だろうが、小生が07年度に授業を担当した、同志社大学のプロジェクト科目「新しい逍遥ガイダンスを作ろう」の研究成果冊子の中で、中村友宣という学生が手作り市に着目した。その彼の書き出し文を借りるとこうだ。「今、私たちはどれだけ人の温もりに触れることができるだろうか。『向こう三軒両隣』のわが町、京都には未だ門掃き（かどはき）などの風習が残ってはいるが、人の温もりが希薄になっていることは否めない。そんな中境内を利用した京都ならではの『手作り市』が活気づいている…」。これは、観光が単なる神社仏閣の上辺見学と化した今、学生がそうでない真の京の魅力を探し求めた際、辿り着いた率直な気持ちに他ならない。

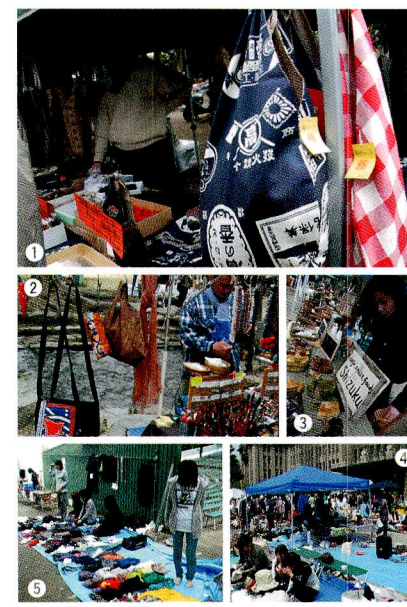
元々この町には21日の弘法さんと25日の天神さんといった2大縁日がある。古着や骨董品などを扱う店々も数多く出店することから、「蚤の市」的要素が魅力で足を運ぶ観光客も少なくないが、そもそもは神仏加護を願う人々には、それぞれの結縁日に参詣する習わしがあり、その人出を当て込んだ露天商がおのずと集まったという訳である。とりわけ境内の広い東寺と北野天満宮は打ってつけの場所だったに違いない。

「蚤の市」といえばフリーマーケットも昨今は再燃ブームである。中でも「京都市ごみ減量推進会議」を旗本に開催される「京都市役所前フリマ」の定着ぶりには、目を見張るものがある。神社境内でのフリマも近頃は盛んに行われている。毎月不定期だが嵐山は松尾大社の「亀の市」。規模は小さいが第一日曜に行われる大将軍は八神社境内の「大将軍一の市」。18日にはフリマと縁日の両方が楽しめる、上御霊前烏丸東入は御霊神社の『ごりょうさんのさえずり市』。28日には南区は壬生八条角の六孫王神社境内の「六孫さんのおもしろ市」が開催されている。小野小町所縁の山科は隋心院のフリマは、3～5月、9月～11月の第4土曜日という不定期ながら、60店舗の規模を見せ好評を博す。まだ未成熟だが、最近イレギュラーながらも地元住民のコミュニティ感覚で行われる下鴨神社のフリマや、円山野外音楽堂での「そら市・円山」なるフリマも始動し、複合商業施設内などで集客・販促目的に行うものではない、純粋なフリマが根付こうとしている。

さて今回、一番特筆すべき屋外マーケットの発展系といえば、やはり「手作り市」ではなかろうか。近年その傾向は前述のフリマと対峙するように、そこかしこの公園や境内で見て取れるようになった。毎月第一木曜日に行われる梅小路公園の「一木手づくり市」はこのGWのグリーンフェアとのコラボで大盛況だったし、毎月8日は小規模ながら地道に行われる松原不明門通は平等寺の「因幡薬師のてづくり市」や、同じ8日に加え18日と2回も開催する、古布・骨董に特化させる豊国神社の「豊国さんのおもしろ市」、また12日にはと寺ノ内大宮東の妙蓮寺で行われる手作り・リサイクル市「西陣楽市楽座桃山文化村」も根強い人気である。

しかしなんといっても手作り市の本流を作ったのは毎月15日に行われる百万遍の「知恩寺」に他ならない。誰の口伝えかは定かでないが、東寺と北野天満宮とこの地を結べば正三角形＝「京のトライアングル」となることから、ここでの市は発展すると言われ'86年から手作り市を開いたのだ。本堂の御影堂に続く石畳を中心に並ぶ店が、当初は100軒にも満たなかったというのに、約20年で350店から400店もあつまる市に発展したのだから、いやはやその都市伝説は本当だった。「御多福珈琲」の野田氏や手作り靴「包」の月森氏のように、若手のこだわり職人やアーティストがこの場所から実を結び、町場で店舗を構えるまでになる。一見だった客も通ううちに馴染みの店ができ、その馴染みの店と客が知己となる。なんとも微笑ましい出会いの図ではなかろうか。そして、この知恩寺の好況ぶりが、上賀茂神社の境内にまでその広がりを見せて行く。

まだ昨年の春から始まったばかりだというのに、集客や出店状況は回を重ねるごとにその数を増やし、活況を呈す。偶然「みうらじゅん」や「峰不二子」「剛田武リサイタル」などのマニアックな消しゴム判子を作り売る店に目が留まる。何気なく店主に「いつもここで出店しているのか」と尋ねれば、「ホームグランドの知恩寺が抽選にもれて、今回は初めてここで勝負に出たんやけど、まずまずの売れ行きかなぁ」と、照れ臭そうに笑った。とにかく町場より俄然安い掘り出し物に巡り合うその逍遥感覚が楽しい。香具師や露天商といったプロを排し、あくまでも自分たちが手作った物を販売する店だけで構成するといった手作り市は、対面販売ならではのコミュニケーションとコミュニティが存在する。これはネットオークションや通販では決して味わえない。商店街同様、この町本来の市のあり方に、人々は飢えているのかもしれない。



❶境内を侵食するかのように、その都度出店の数が増える上賀茂神社の手作り市。こちらは昔の米袋を模して作った和柄の手提げ袋。1000円を交渉、確か700円で購入した。浴衣着にも似合う。❷千鳥柄のショルダーに、箸で作られたかんざし。店の背後に流れる小川のせせらぎを聞くと「風そよぐ奈良の小川の夕暮れは、みそぎぞ夏のしるしなりける」の小倉百人一首を思い出す。❸cafe＆cakes「Shizuku」で売られるホームメイドケーキ。境内のほどよい木陰で売られるパンやコーヒー、ハムなどが上賀茂神社には何故かよく似合う。❹すっかり京都のスワップミート的存在になった、市役所前フリマ。私も最近は皆勤賞モノである。わが社名にも用いる、ハワイの木彫りの守り神「Tiki」＝チキが最近よく出回る。1体200円～300円と現地土産より安いから、即買いだ。❺円山野外音楽堂で始まった「そら市・円山」。まだ未成熟だがステージ周りを出店数で埋め尽くせば、さながらハワイのアロハスタジアムだ。乞うご期待。

モックン・カズロー●京都生まれの京都育ち、生家は染屋という生粋の京都人。現在の「京都CF!」の根幹に携わった前編集長。現在は「京都CF!」のご意見番を務める傍ら、広告企画制作から同志社大学のプロジェクト講師まで、ジャンルの垣根を越えて京都にまつわる仕事に従事する。趣味のサーフィンより、街場の小波に乗るのが上手いともっぱらの評判である。「京都CF！」スタッフブログ「ご意見番の無責任、町案内」連載中